

○樋口 寿* 武副礼子** 黒川由美*³ 平井和子*³(*大阪女子学園短大、**大阪府立看護大医療技術短大、*³大阪市大)

【目的】 近年アレルギー性疾患の増加が著しく、その要因として食生活や環境因子などが挙げられている。そこで本研究では、高校生のアレルギー性疾患発症の実態を調べ、発症要因や健康に関連する意識について検討した。

【方法】 大阪府内の高校生 461 人（男子 177 人、女子 284 人）を対象に、平成 4 年 1 月にアレルギー性疾患の最近 1 年間における発症経験と健康に関連する生活習慣への意識についてアンケート調査を行った。

【結果】 アレルギー性症状経験者は男子 67.6%、女子 67.4%であった。発症時期は男女ともに不規則が各々 49.1%、46.3%と最も多く、次に季節性、通年性の順であった。男子ではアレルギー性鼻炎が 38.4%で最も多く、次にアトピー性皮膚炎 16.5%で、アレルギー性結膜炎と花粉症が各々 13.5%であった。女子はアレルギー性鼻炎が 30.3%と最も多く、次にアトピー性皮膚炎 18.6%、尋麻疹 17.1%、花粉症 11.7%の順で、性差がみられた。アレルギー性症状がおこる原因に対して“家のほこりやダニ”と答えた割合は 53.4%と最も多く、次に“花粉” 49.8%、“特定の食物” 21.5%、“ペット” (14.6%)、“精神的環境” (11.4%)の順であった。アレルギー症状を感じた時の対応としては、66.7%が“無処置”で最も多く、“受診” 37.9%、“服薬” 24.7%の順であった。アレルギー性疾患経験者の男子では菓子の摂取頻度が高く、女子では卵、肉類の摂取頻度が高かった。アレルギー性症状経験者の男子では“排便が週に 3 回以下”が 8.1%、“不規則”が 15.1%で、アレルギー性症状の無経験者（各々 1.1%と 6.8%）よりも多い傾向がみられた。